

渡邊卓著

『日本書紀』受容史研究

— 国学における方法 —

松本 丘

編述以来千三百に垂んとする『日本書紀』は、我が国にて最も長く読まれ続けてきた典籍といつてよいであらう。従つて、『日本書紀』そのものについての研究には、当然ながら龐大な蓄積があるわけであるが、『日本書紀』が如何に読まれてきたのかといふことについては、それほど解明が進んでゐないのではあるまいか。さうした中、昭和五十四年生まれ若き研究者渡邊卓氏が、國學院大學へ提出した博士学位論文に、加筆して上梓せられたのが本書である。評者は神道学を専門とする者であるので、不適任とは思ふが、紹介を兼ねて若干の感懷を述べてみたい。

さて、本書にては「国学」を、「近世において規定された思想的イデオロギーを含むものではなく、中華文明に対

して自国を意識した学問」(序論)であるとし、また、『日本書紀』本文に含まれる和語と漢語の交渉から、『日本書紀』研究は展開したのである。その和語交渉の歴史を国学として考えれば、時代は限定されるべきものではなく、またイデオロギーでもない。『日本書紀』という例によつて述べるならば、『日本書紀』に描かれる世界を知ることが「国学」としての営みである。そして、それを知る方法として文献をどのように理解するかを考えるのもまた「国学」ということになる(「結論」とも述べられてゐて、「国学」を文献学と捉へる立場から、『日本書紀』を読み解く上にて、国学や国学者の業績を再検討し、『日本書紀』研究史の再構築を試みてゐる。(余計なことだが、書名に「受容史研究」とあるのは、国書たる『紀』にはそぐはない気がせぬでもない。)

その構成は、「近世国学までの『日本書紀』研究史」「荷田春満の『日本書紀』研究」「近代における『日本書紀』研究」の三章と、序論・結論となつてゐる。

まず第一章より見ると、第一節「上代文献の訓読と『日本書紀』研究」では、訓読を必要とした『紀』を、和語を漢語にて表記したものと位置付け、朝廷に於ける講筵等を通して、『紀』訓読には、日本を知らうとする「対内性」が存し、ここに国学的意識の発生と、近世への連続性を見

てゐる。

第二節「注釈史からみた『日本書紀抄』の成立」では、「私記」から『釈日本紀』『日本書紀纂疏』、そして「日本書紀抄」に至る注釈史を辿り、「抄」には卜部家学と共に、五山文学を介した漢土の注釈法の影響もあるとする。そして、この「抄物」の様式が近世の注釈法を導いたと論ずる。

第三節「『日本書紀抄』にみる注釈の継承と展開」は、吉田家における「日本書紀抄」諸本のうち、「兼俱抄」と、清原宣賢による「先抄本」及び「後抄本」とに焦点を当て、その発生と展開とを明らかにし、特に「後抄本」には、開書から文献注釈への転換、家学の知的財産としての伝授方法に変化が見られると説く。

この第一章では、古代から中世に至るまで連綿と受け継がれて来た『紀』研究の系譜が詳細に考察されてをり、近世の学問を明らかにする上にて、中世以前の研究が如何に大きな比重を占めてゐるのかを痛感せしめられた。ただ、各文献からの引用が少ないやうに感ぜられ、影響関係等の考察には、もう少し具体例を挙げてあるとさらに説得力が増したものと思はれる。

次に、第二章は春満の書紀研究を扱ひ、第一節「荷田春満の『日本書紀』研究と卜部家」では、『旧事紀』論・「一書」論・「凡三神」論・訓読法のそれぞれについて、卜部

家説と春満説との比較を行ひ、春満に於ける卜部説の影響と、彼の姿勢が文献解釈に基づく実証的なものであることを明らかにしてゐる。

第二節「青年期における荷田春満の『日本書紀』研究―東丸神社蔵『神代聞書』翻刻を通じて―」では、著者も参加した東羽倉家の調査によつて再発見せられた『神代聞書』が翻刻され、春満青年期の学説に奥村仲之『神代卷講習次第抄』の影響が認められること、その後の春満の学説の変化は、伝授によるものから、注釈や門人への講義に移行する研究態度の転換と揆を一にしてゐるとする。

第三節「荷田春満の『仮名日本紀』」にては、春満の関はつた「仮名日本紀」のうち、彼の説と認められるものについて考察し、『紀』を「やまとことば」として捉へる春満の態度、清濁の区別に意を用ゐる等、彼の『紀』訓読の特徴を指摘し、研究史上の価値を強調してゐる。

第四節「荷田春満自筆『漢字仮名交じり本』の位置づけ」は、春満自筆に係る「漢字仮名交じり本」の「仮名日本紀」を、諸本との比較を通して三手文庫本との関連が深いとし、『紀』訓読文としての「仮名日本紀」を、訓読史の中に位置付ける必要性を述べる。

第五節「荷田春満と賀茂真淵の『日本書紀』研究―訓読研究を中心に―」では、春満の「仮名日本紀」と賀茂真淵

の『日本紀訓考』との比較考察から、両者の訓読方法の相違点・共通点を指摘し、特に『古事記』の訓みを利用する真淵の訓法にその時代性を見てゐる。

最新の調査に基いた本章は、松本久史氏『荷田春満の国学と神道史』（弘文堂、平成十七年）、城崎陽子氏『近世国学と万葉集研究』（おうふう、平成二十一年）と共に、新しい春満像を呈示した注目すべき成果といつてよく、特に春満の学問が変遷深化してゆく状が生き生きと描き出されてをり、近世国学の草創を考へる上にて、貴重材料が提供されてゐる。但し本章では、春満の所説が『日本紀』を参照してゐることを以て、卜部説流入の根拠とされてゐるが、『日本紀』は当時既に刊行を見てをり、伊勢の度会延佳ですら自らの講義にて『日本紀』を引用してゐる。さらに寛文四年に版となつた『神代合解』が手許にあれば、兼俱・宣賢・口訣・纂疏の各説を通覧できるといふ当時の状況にあつて、春満への卜部説の影響を如何に評価するかはさらなる検討を要するであらう。

第三章「近代における『日本書紀』研究」では、これまであまり取り挙げられてゐなかつた武田祐吉と折口信夫の『日本紀』研究に注目し、第一節の「武田祐吉の『日本書紀』研究―新出資料と著作を通して―」では、武田に関する新出資料より、その学問形成の過程を辿り、武田の『日本紀』関

連の著作から彼の研究姿勢をも明らかにし、時制を重んずる訓読法は本居宣長の『古事記』訓読にも通ずる国学的方法を踏まへたものであるとする。

第二節「折口信夫の『日本紀の会』と『日本書紀』研究」は、折口が主催した「日本紀の会」に於ける講義の内容から、「直感」による『日本紀』本文の校訂、かの「まれびと」論に基づく訓読等の独自性は、文献の表面的現象に捉はれない新たな視点から導き出されたものと説く。

本章では、近代に疎い評者にとつては新鮮な発見が多く、「国学」の流れが近代にも脈々と息づいてゐることに改めて思ひを致したことであつた。

以上の如く、古代から近代に至る広い視点から炙り出された本書の「国学」像は、『日本書紀』研究史に、新生面を開いたものといふことができよう。特に、東羽倉家資料や武田祐吉博士関係資料といった最新の調査を活用しての考察は、今後の研究の基礎となるであらう。

そして、近世神道史を専門とする評者の関心からいふと、本書では荷田春満の『日本紀』研究が主であつたので、今後著者にはさらに『日本書紀伝』や『日本書紀通釈』に至る他の国学者、或いは谷川士清や河村秀根を始めとする他派の学者にも対象を広げ、より精緻な『日本書紀』研究史の構築に邁進せられんことを期待しつつ、拙文の筆を擱くこと

とする。

（笠間書院、平成二十四年二月、A5判、二八二頁、本体五五〇〇円）

（皇學館大学文学部准教授）

宮本營士著

『御歌所と国学者』

上 西 亘

本書は新進気鋭の近代神道思想史研究者である著者が、平成二十一年提出の博士論文「神道系御歌所歌人の基礎的研究」に大幅な加筆調整をし、内容の増補と書き下ろしの五章の論考を加えて刊行されたものである。

本書の題名の一部にもなっている「御歌所」というターム自体、戦前の業績である恒川平一『御歌所の研究』や、小泉蓼三『近代短歌史 明治篇』を始めとして先行研究は殊の外尠く、未開拓の分野であった。

また、御歌所に関わる事柄として近代和歌における歌人の位置づけと両者のやりとりが思い出されよう。評者のごとく当該分野に闇い一般的な人々の理解では、「旧派」が明治三十年を境にして、「新派」の興隆に取って代わられ、以後「新派」が歌壇の潮流をリードしていったという解説が一般的な「模範解答」と考えがちではなからうか。

だが、この当時の「旧派」と「新派」を今一度公平に見